

令和という時代を考える

国際経済労働研究所 会長 板東 慧

コロナという流行で見える時代

今、直面していることで感じられるのは、コロナという流行病が昨年来終末期を迎えているように見えて、なかなか克服できないという現実がある。かつての時代にも流行病が一時代を執拗にさまよったことがあったが、恐らくそこまで行くとは思えないが、ずいぶん医学や公衆衛生の発達した現代でも気になることではある。このような事例は今までも感じるがあった。この時代においても未だこの種の気になる事象は時に顕在化する。これは主に人間の「サガ（性）」にかかわるものといえようが、未だ

この種のものはなくならない傾向がある。これに類する現象はしばしば世相ともいえるカタチで現れる。その種のものとは必ずしも同じではないが、「時代」を象徴するような「はやりもの」は必ず生まれる。それは様々な類似現象を伴ってくるものといえる。

それは社会現象の「大小」を問わない。そこで、その種の時代的特徴ともいえるものを探ると様々な事象が浮かび上がってくる。

そこで、そのような意味から時代的特徴に類するものにあたってみよう。

21世紀とはどのような世界か

さて、20世紀から21世紀に入って特筆すべき世界の動向は何か。それは20世紀に形成された世界秩序の骨格をめぐって特筆すべき変化が生じつつあることであろう。

その第1は、ソ連邦社会主義体制が変質してソ連圏が解体したこと、

第2に、EUから英連邦が離脱（Brexit）し

てその相互関係に基本的変化が生じたこと、

第3に、社会主義中国が独自路線を明確にしてきたこと、

第4に、世界の地域ブロック化が政治的にも経済的にも明確化し、地域ブロックレベルの活動がより際立ってきたこと、などが挙げられる。

ただ、それが今後どのような形態に発展して

いくつかは未だ流動的であり、他方 20 世紀における主要潮流として形成された「世界が米ソ 2 大勢力によって分断あるいは対峙する」という傾向が希薄になりつつあることが指摘される。

地球上の国々は地域ブロック単位で地域経済の利害を基準に行動する傾向が強まると共に、新たな地球温暖化問題をめぐって様々な行動を起こす傾向を強めている。例えば、地球温暖化問題や新型コロナウイルス問題など、健康・病理・環境問題、災害問題・地域経済問題・マイノリティへの対応問題などをめぐる摩擦制御や社会的規範の確立をめぐる行動などに力を注ぐ傾向が強まっている。このことを通じて地球上における地域単位の規範の確立やそれらをめぐる行動の相互関係によって新たな諸関係が生まれ、その結果もたらされる影響が大きくなるであろう。

これらの背景には、第 1 に第二次大戦の結果独立した一種の世界非戦秩序の下で国家間・地域間の紛争処理システムが巧みに機能してきたこと、第 2 にその上で途上国が大きく発展して成長し、先進国との間でも対立することなく協調して対応してきていることがあり、第 3 に地球上で地域ブロック経済圏の形成がすすんだこ

とがあげられる。もとより、これを支える体制として国際連合という新たな世界システムが成立したことが特筆されるべきであろう。かくて 21 世紀は全く新たな世界秩序の下で迎えた世紀であり、さらにこれらを基盤として宇宙開発を発展させる局面に発展したのである。

この意味において、人類は「地球レベルの行動」を超越して新たな活動局面を開発したことになり、まさしく新たな世紀を切り拓いたことになり、それに対応する世界観ともいえるべき哲学が求められているといえよう。

これに伴って自然科学の領域においても、生活の領域においても、さらに人生観や生き方においても、当然新たな地平を切り拓くことになり、そこに新たな生き様を描くことになろう。

21 世紀は、人類にとってこの新しい課題に直面し、新たな体験を集積し、あるいは困難にぶつかり、そしてその課題を切り拓いていく過程である。

この意味では、21 世紀は従来を踏襲する課題というよりは地球上で取り組むべき全く新しい課題に直面しているといつて過言ではないといえる。